



右頁写真：通りより書店の外観をみる。店舗は、築80～100年の町家を改修したもの。現在の場所に移ったのは、昭和30年頃で、改修は、1982年、吉村篤一氏によるもの。

本頁上写真：「H型鋼が3本重なった軒先は、町家の陰翳や直線美を表現し、入口となる赤い格子戸は、町家でいうところの潜り戸」と、京都のDNAがこの建物の素材やファサードに込められていると、店主の山岸豊さん。格子戸のモジュールは、伝統的な寸法を引用しているのではなく、吉村篤一さんが実寸で建具の姿図を現地で見合わせながら、ああでもない、こうでもない、と検討して決めたデザインだという。格子戸は本ベンガラ塗り。またファサードのガラスにはブロンズが入っていて、昼間は中から通りが見えやすく、外の通りからは内部が見えにくい関係がつけられている

(設計＝吉村篤一／建築環境研究所 施工＝熊倉工務店 1982年)
本頁下写真：店内の様子。茶室をはじめ数寄屋関係や和風の専門書が充実している

シリーズ第4回 街にひらく書店

大龍堂書店

京都市中京区 写真＝田中千尋

ほんまの文化人が必要な時代
京都の文化を育てる書店

戦前、京都で洋書を扱っていた本屋はふたつだけだったという。

ひとつは、麩屋町三条西入ルにあった「京都丸善」。様々な小説や随筆にも登場する有名な書店である。たとえば、梶井基次郎の『檸檬』では、「以前私の好きであった所は、たとえば丸善であった。赤や黄のオールドコロンやオールドキーン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壺、煙管、小刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに一時間も費すことがあった。そして結局一等級いい鉛筆を一本買うくらいは贅沢をするのだった。」(梶井基次郎『檸檬』)そしてラストシーンで檸檬を置いてくる本屋さんこそ、この京都丸善であった。当時のハイカラな学生は、丸善で洋書をあさり、その帰りに寺町二条の「鑑屋」で洋菓子を食べるのが定番コースだったようで、彼等の知的な刺激に溢れた、洒落た生活が想像される。

そして、洋書を扱うもうひとつの本屋が、京都・河原町御池通りにあった「大黒屋」であった。こちらについても、日本を代表する哲学者・三木清が随筆で残している。

「私がヴォルテールの『哲学辞書』を買ったのは、たしか大黒屋という本屋であったと思う。これは京都ホテルの前にあった洋書店で、ホテルに来る外人が主な客であつたらしいが、現在はなくなつてしまつたようだ。京都で洋書を売つていたのは丸善とこの二軒であつたので、私は学生時代に折々出掛けて行つたが、或る時この本を見出ししたのである。初めてそれを手に取つたとき、ヴォルテールと哲学辞書とがうまく結び附かなかつた。ヴォルテールが辞書を編集するような人と考えられなかつたし、その内容も一見普通の辞書のようにではなかつたので、当時フランスものについて知識の極めて貧弱であつた私は、半信半疑であつたのだが、ともかくフランマリオン叢書であるから、信用して

隊招集されたものの、戦後無店舗商法により本格的に商売を始めた。日本画家・上村松園の自宅近く、竹屋町にあつた若松工務店の2階を事務所として注文を請けた。書籍を自転車ですり一円配達して廻つていたという。しばらくして、現在の場所に移つたのが昭和30年くらいのこと。

大黒屋は、洋書やアートプリントなどを扱う店で、建築専門ではなかつた。建築専門書店へと移行していったのは、何かのきっかけで店の近くの京都市役所管轄課へ出入りし始めたことがきっかけではないかという。いまの京都市役所(設計Ⅱ武田五一・中野進)／東半分1927年、西半分1931年)建築時には、ゴシック建築の資料を集めて管轄課に持つて行つたという話を、現・店主の山岸豊さんは先代から伝え聞いているという。不慣れた建築様式を実現するために、大黒屋が納めた洋書を食ひ入るように読み込みながら、昼夜製図板に向かつて人々がおられたのではないかと想像する。まだ情報が充分でない時代に本が果たした役割は大きかつただろう。

現在店主の山岸豊さんが、大龍堂書店を継いだのが、73年。しかし76年に先代が急逝され、こうした本屋の足跡をゆつくり聞くことはできなかつたという。さまざまな方から先代の足跡を伝え聞くなか、本屋の枠を超えた活動として「無名建築連明鉄扉社・京都支部長」を務めていたことを知る。そこでは西山卯三、安井全工務店、若松工務店など、京都の建築界を担う第一線が集つて議論を交わす場をつくつていた。いわば影の功労者だつたと、先代と親好の深かつた建築家の河野通祐さんから聞き、山岸豊さんは影響を受けた。その後、河野さんと「ラスキン会※1」を設立。吉村篤一さんと始めた「京都建築フォーラム※2」でも、講演会やミニコミ誌をつくるなど積極的に活動を広げていく。また大龍堂書店発行の出版物も多くあり、中でも『日本建築古典叢書』全4巻は、日本中の家伝書、秘伝書など約500冊の資料から各雛形を示し



買って帰つた。今思い出して恥しい次第である。」(三木清『辞書の客観性』三木清全集 第17巻岩波書店/68年) また人類学者の今西錦司の著作『ダーウィン論』でも、ここでダーウィン『人類の由来』の英語版を購入したことが描かれており、大黒屋店主との情景が描かれる場面もある。

京都丸善も大黒屋も、当時の学者や文芸家、芸術家にとつて、未知なる知の世界と接触する特別な場所であつたことが容易に想像できる。しばしば思いもよらないような書籍にぶちあたり、偶発的な出会いや感情が、彼等の思考を刺激し続けていたことだろう。本屋とは、本を買うだけの場所ではない、それは今も昔も変わらないのではないだろうか。



た集大成で圧巻である。書店内には訪れたお客さんとの会話の場「salon de TAIRYUDO」をつくつた。いわば「建築かけこみ寺」で、今日も入れ替わり立ち代わりお客さんがみえる。こうした交流から、山岸さんも自分なりの法則や、これからの方向性を見つけて出してきた。

「いまはインターネットなどで書籍文化が薄れてきていますが、ページをめくりながら五感で本を読む喜びや感性を失つてはいけないと思ふんです。これからは遊びも設計も、いかに前頭葉を使つていろいろなことが考えられるか。これからほんまの文化人が育つていかないとイケません。書ができて、絵ができて、文章が書ける、そういう本来の文化人の姿をもう一度とりもどしたい。」(山岸さん)

かつての知識人や文化人のように、京都の町を優雅に跳び歩きながら、大龍堂書店をふらりと訪れてみたい。見識を広げ、様々な文化や知性に触れる場を、今も昔も変わらず本屋さんは提供してくれる。(文責Ⅱ編集部)

※1「ラスキン会」…建築家・河野通祐氏が続けてきた建築文化活動から派生したもの(1965年発足)
※2「京都建築フォーラム」…刈谷勇雅氏(京都市都市計画局風致課・瀬戸一海(建築家・加藤建築事務所勤務、立入横道)京都市都市計画局・風致課、吉村篤一(建築家・建築環境研究所所長、山岸豊(大龍堂書店店主・事務局)が発起人(1965年発足)

本見開き写真：店内の一角で繰り広げられる「salon de TAIRYUDO」のようす。大龍堂さんを訪れる多くのお客さんが、山岸さんと話をして帰られる。建築談義から近況報告までさまざま。山岸さんご自身も、ここで先代の話を目にしたという。上写真：前面の通りからみる「大龍堂書店」。周囲は随分マンションやビルに建替えられたが、まだ両隣りは古くからの町家が残る

大龍堂書店

住所：京都市中京区新堀木町通竹屋町上ル西草堂町 175
電話：075-231-3036 FAX：075-231-2533
URL：http://tairyudo.com/
営業日：平日 9:00 - 19:00 日祝 13:00 - 18:00
(第 1,3,5 日曜日)